

成果報告書

記入日 2017年 4月 13日

氏名 相川拓也	渡航先国名 大韓民国	所属機関 成均館大学校 東アジア学院
研究テーマ： 李箱、朴泰遠、鄭人沢の文学と植民地都市京城——モダニズムから総力戦の時代		
研究期間： 2015年3月～2017年2月		
研究成果(概要) 大学院博士課程での修学、資料収集、関連学会への参加、数回の調査旅行、研究対象となる文学テキストの読解と分析を進め、植民地という現実の混沌を実験的な言語によって表現しようとした李箱、細密な描写の技法を駆使することで京城に生きる人々の生の微妙な感覚を捉えた朴泰遠、植民地末期という時代に国家権力と文学創作との微妙な関係を身をもって示した鄭人沢という、本研究で扱う3人の作家像を構成することができた。		
研究成果(詳細) 本研究は、朝鮮の植民地都市・京城（現・ソウル）に生きた3人の作家、李箱（イ・サン、1910～1937）、朴泰遠（パク・テウォン、1910～1986）、鄭人沢（チョン・インテク、1909～1953？）の文学テキストの読解を通じて、植民地時代後半期（1930～1945年）の朝鮮の人々の生のありようがどのようなものであり、日韓・日朝間の歴史問題の核心である日本の朝鮮に対する植民地支配をどのように捉え返せるかを問う文学研究である。留学期間中は、成均館大学校東アジア学院の大学院博士課程に在籍し、授業への参加を通じて韓国文学研究の方法や視角について改めて学ぶとともに、韓国文学史上の「モダニズム」の代表的作家として知られている上記3人の作家についての研究動向をリアルタイムで追うことができた。また、成均館大が位置するソウル市鍾路（チョンノ）区～城北（ソンブク）区一帯は朝鮮王朝時代の王都の中心からも近く、植民地時代の文人が多く住んだ地域でもある。当時の作家たちが住んだ家や歩いた道などを直接訪ねてみることは、研究を進めるうえで大きな刺激になった。 以下、研究対象となる3人の作家ごとに研究成果の内容を整理する。 前衛的かつ謎めいた作品を多く残したことで知られる李箱は、報告者が学部時代から関心を持ち、修士論文でも中心的に扱った作家である。今回の留学では、李箱の最初の作品である長編小説『12月12日』（1930）と、彼のキャリア全体を貫く日本語と朝鮮語の言語横断の問題を中心に分析を進めた。 『12月12日』は李箱唯一の長篇小説であり、結核による咯血体験や李箱の家族をめぐる個人史を題材にした作品として知られてきた。本研究では、作家の伝記的事実との連結を重要視した先行研究の成果を認めつつもそこからは距離を置き、大日本帝国というシステムに編入された京城という都市で可能となった世界認識を主題とした小説として、『12月12日』を再解釈した。『12月12日』が連載された朝鮮総督府発行の雑誌『朝鮮』というメディアの問題、神戸～名古屋～樺太～東京に至る主人公の移動経路と地理的想像力の連関、蓋然性を破		

綻させるかのような「偶然」や「運命」に依拠し、主人公を破滅へと追いやっていく物語構成に着目し、自らの意志を超えた力によって動いていくと感ぜられる植民地という世界に対する認識を、この小説から読み取れると結論づけた。『12月12日』論は学術誌に論文として発表したほか、韓国近代文学と日本との関わりをテーマにした論文集（김재용・윤영실 엮음 『한국 근대문학과 동아시아 1: 일본』 서울: 소명출판, 2017年）にも収録された。

李箱が生涯を通じて実践しつづけた言語横断については、李箱がキャリアの初期に発表した日本語詩の問題を中心に研究を進めた。漢字を共有しながら異なる表記体系を持つ両言語の関係、同時代にありながらそれぞれ独自の展開を見せていた詩的表現、文脈と法的地位を異にする言説空間と読者の問題を念頭に置きながら、日本語と朝鮮語の双方で創作を行った李箱の営みを言語横断的实践（Lydia Liu）として位置づけ、その創作の特徴を改めて考察した。日本語詩の読解を通じて、これらの詩が同時代の日本での前衛詩の流れに位置づけられることを確認すると同時に、朝鮮での朝鮮語による詩の展開とは別の文脈によっていることを指摘したうえで、植民地都市京城の言語的混沌、都市開発、資本主義化と格差の拡大といった現実と照応しあう表現が成立していることを論じた。また、植民地支配者の言語での創作から被支配者の言語である朝鮮語による創作への横断を通じて、自明なものでない言語として「朝鮮語」が見出されたことが、実験的な表現を試みる原動力となったのではないかという仮説を立てた。李箱の言語横断に関する議論に対しては、学会での発表と討論を通じて多くの助言や示唆を得ることができた。

朴泰遠は、その綿密な描写や技巧的な新しさが高く評価される作家である。報告者は留学前に朴泰遠の表現技法についての小論文を執筆しているが、留学中には、緻密に計算された語彙や文体の選択、植民地における「小説家」という存在、人々の生活と植民地支配の時代的変遷といったテーマを、分析対象となる作品から読み取っていく作業を行った。

朴泰遠は作家として登壇して間もない時期に、自身の姿を投影した小説家を主人公とした作品を残しており、既存の研究でも注目されてきた。本研究では、そうした一連の作品の嚆矢となる「寂滅」（1930）から「疲労」（1933）、そしてこの時期の集大成であり朴泰遠の代表作でもある「小説家仇甫（クボ）氏の一日」（1934）までを対象に、小説の語りを朴泰遠自身が書いた表現論を念頭に置きながら分析した。この分析を通じて、「小説家」という存在がどのように捉えられ、その認識がどう変遷していくのかを明らかにしようと試みた。結果、「寂滅」では「精神異常者」と世間から見なされている人物の語りとその場の空気感まで含めて精密に文字化されることで、物語る行為そのものに焦点化するとともにそこに作用する植民地権力の問題が見据えられていること、「疲労」では小説家の書く行為と京城の言語的混沌が「疲労」という身体感覚と結び付けられて提示されていること、「小説家仇甫氏の一日」では、純ハングル文と漢字ハングル混用文という2つの朝鮮語文体の差異、および男性主人公に対して投げかけられる様々な境遇の女性登場人物たちからの批評的眼差しが連関しあいながら、知識人の内面から市井の人々の生の感覚へ、という表現者としての主題的転換が宣言されていることが論証された。こうした朴泰遠初期小説の展開は、1930年代後半の朴泰遠の作品世界へつながるものと位置づけられる。この議論は、学術誌論文として投稿し、掲載に至ったが、査読の過程で多くの助言を得ることができた。

1930年代の朴泰遠の創作活動は、長篇小説『川辺の風景』（1936～1938）と中篇小説「路地の奥」（1939）に結実する。留学中には「路地の奥」の読解に集中的に取り組み、学会発表を経て学術誌論文掲載に至った。「路地の奥」では、『川辺の風景』でも用いられた群像劇の手法により、階級や経済状況、職業、ジェンダー、世代の違いが生み出す登場人物間の微妙なすれ違いや葛藤が細やかに描かれている。これまでこの作品は、京城の下層民

の姿を同情を込めて描いたものと見なされてきたが、テキストの精読を通じて、同じ「路地」に住む人々の間にも多様な格差が存在することが、登場人物のセリフや行動、生活様式を通じて示されており、「路地」の外の世界——植民地近代のもたらした資本、商品、享楽が流通する世界——とも接続されることで、人々の経験の多層性が捉えられていることを明らかにした。さらに、この時期本格化・泥沼化していた日中戦争と、朝鮮での総動員体制の確立という時局を重ね合わせて読み、「路地の奥」では『川辺の風景』の時期とは異なる様相を帯びはじめた人々の生と社会との関係が暗示されていることを論じた。「路地の奥」については、論文掲載後に学会での集中討論の機会に恵まれ、他の研究者とも意見を交換して作品に対する理解を深めることができた。

鄭人沢は、韓国近代文学の研究者にとってはよく知られている作家ではあるものの、李箱や朴泰遠、また他の主要作家に比べると十分に研究されているとは言いがたい。そのためか、韓国の研究者にこの研究の構想を話すと、鄭人沢をどういうふうに論じるのかが楽しみだという感想をもらうことが多かった。「モダニスト」から「親日作家」（ふつう、植民地時代に関連して韓国語で言う「親日」とは、その対象を「民族に対する罪を犯した者」として糾弾する罵倒語である）へと進んでいった鄭人沢の歩みを文学史的に意味づけることの難しさと、日本語で書かれた作品が多いことが、そうした期待の理由であると思われる。

留学中には鄭人沢研究と関連して、最近韓国で関心が高まっている分野である近代朝鮮と中国大陸、および満洲国との関連についての研究に触れることができた。こうした研究動向に触発され、鄭人沢の重要な転換点として満洲国の朝鮮人開拓地への視察体験に着目し、その体験から生まれた2篇の小説を読解・分析した。朝鮮語で書かれた「黒い土と白い顔」（1942）という小説は、表面的に見れば、過去の失恋にとらわれていた主人公＝作家が満洲視察体験を通じてその痛みを克服し、自身に与えられた「課業」に目覚める、という物語である。鄭人沢自身の姿を思わせる作家が登場し、国策協力への呼応という自身の選択を正当化するような作品として評価されてきており、そうした側面は否定しがたい。だが、この小説の物語上の駆動力である、主人公が満洲で出会う女性（主人公の元恋人とよく似ているとされる）の正体は誰なのかというサスペンスが、クライマックスにおいて破綻している点に本研究では注目した。そうして、サスペンスに対する読者の期待を裏切るこの小説の語りの構造自体が、（意図的な仕掛けであると確定はできないが）プロパガンダの本質である思考停止の瞬間、考えることをやめたプロパガンダの主体ならぬ主体の誕生の瞬間をあらわにするものであると論じた。一方、日本語小説「濃霧」（1942）では、日本語による戦争文学の語りの典型を利用しつつ、満洲の戦地でトラック運転手として働く主人公の、満洲へ入植してきたかもしれない父への想像的思慕や日本軍に対する神格化が、満洲という地に投影されるファンタジーと結びついている。こうした幾重にも折り重なった幻想の語りは、鄭人沢が実際に見聞した兵営国家の一部となった開拓部落の現実を覆い隠し、小説中にも描かれた戦局の厳しさ、戦闘行為の無謀さを無化していく。満洲体験を経て生まれた2篇の小説に見られる、葛藤が超越的な力によって無意味化されるという物語の型は、鄭人沢のその後の国策文学のひとつの軸となるものである。

研究全体を見通す視点についても、「モダニズム文学」や「親日文学」の枠を超えた、言語、資本、生政治などの問題が絡みあった植民地後半期の近代性の変遷の問題として捉えることの必要性を示唆された。以上の研究成果をもとに、それぞれの作家についての議論をさらに補完していくことで、モダニズムから総力戦の時代を貫通する朝鮮での植民地近代の一側面を提示することができると思う。

留学中の生活・研究でのトピックス

留学中に遭遇した何よりも大きな事件は、2016年秋から2017年初頭にかけて世界的にも大きな話題となった、朴槿恵・前大統領の罷免をめぐる一連の過程である。初めは小さな事実が少しずつ判明していき、やがて政権に対する国民的な批判の運動へとつながっていくダイナミックな流れは、現地生活してこそ体験できたものだと感じている。青瓦台（大統領府）から直線距離で2km足らずの場所に住んでいたこともあり、毎週土曜日に大統領辞任を求める集会が光化門広場で開かれるようになってからは、時間の許すかぎり集会に直接歩いて出向き、集まった人々の主張に耳を傾けた。日本で暮らしているとなかなか感じることの難しい（と私は思っている）「民主主義」という言葉の持つ力を、100万人前後の人が行き交った集会の中で再認識することができたのは、本当に得難い経験だった。

この事件と関連して、韓国の若い世代を中心に広まっている「헬조선（ヘル朝鮮）」という言葉を紹介したい。これは、自分たちの住んでいる国が地獄（hell）のようだ、という意味の言葉だが（韓国でも日本と同様、若年層の生活難は深刻な社会問題である）、この言葉に込められた自国社会を客観化し

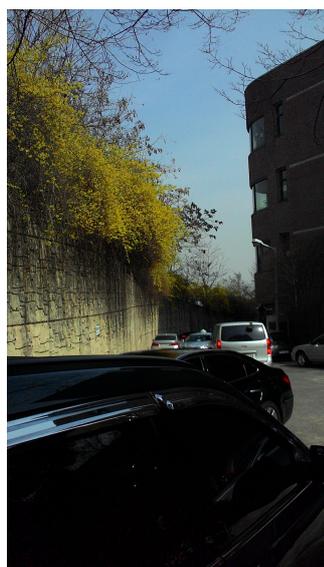
批判的に見つめる態度が、今回の大統領罷免へとつながった運動のひとつの原動力であったようにも感じられる。今後も韓国という国と付き合っていく者として、韓国社会の今後を楽しみに見守りたいと思っている。

また、ソウルで生活する日本人や在日コリアンの友人も多く得た。特に、博士論文執筆という同じ目標を共有する仲間たちの研究会に参加し、様々な専門や背景を持つ人々と、日本語で議論する機会を持つことができたのは、外国生活という条件の中では非常に貴重だった。韓国研究や韓国と日本をつなぐ取り組みを行う大事な同僚を得られたことは、今後の人生で大きな意味を持つことと思う。



光化門広場（景福宮前）での大統領弾劾を求める集会

今後の社会貢献



韓国の春の風物詩、レンギョウの花。成均館大キャンパスにて

まずは、今回の留学で得た研究成果を反映し、現在在籍する東京大学に、上記の主題に基づく博士論文を提出し学位を得ることを第一の目標とする。そのうえで、大学その他の機関での研究・教育、学術論文や一般向けのものも含めた著書の出版、日本ではいまだに一般的とは言えない朝鮮・韓国文学作品の翻訳などを通じて、日本社会での韓国理解に貢献するような活動を行っていきたい。と同時に、今回の留学で築いた人脈を活かして韓国の学界、ヨーロッパやアメリカの韓国学研究者とも連絡を取り合いながら、国際的にも意味のある学問的成果を出せるよう努力するつもりである。こうした活動が、日韓両国に残る国民間の感情のうえでの無理解、偏見、すれ違いを少しでも減じる結果につながっていけばよいと思う。